

ホトトギス

六 月 号



去年今年

稲畑汀子

次々声が飛び込んで来た。廣太郎一家である。

「わあ、愛ちゃん大きくなったじゃないの。もう高校生なものねえ」

「はあーい。そうです」

「順太は幾つになったの？」

「僕はこんどのお誕生日で九歳！」

「さあ、二階へ荷物を置いていらっしやい」

「はあーい」

今年は娘の頼子一家は帰って来ない。

「マットが桜の咲く頃に皆で行こうって言うのよ！」

「そうしなさい」

昔、お正月に来た時に風邪を引いて熱を出したことがあるマツトは日本のお正月に余りいい印象を持っていないことは知っていた。来ないと聞いてほっとした。

インターフォンが鳴って深二郎が帰ってきた。

「二日には東京に帰らんと……」

来る早々から帰ることを言う。

「二日に一家の写真を撮りにカメラマンの蛭田さんが来ることになってから……帰るのはそれからにしてよ。何時の列車なの？ 駅まで送って行くから」

「一時過ぎ頃出るから」

皆が帰ってくると私は主婦になって食事のことをしななければならぬが、廣太郎夫妻が何かとやってくれるのでたすかった。手が空くと残した仕事をするに於いて机に向かうが、隣のパソコンで順太がピージャーニングガラガラとゲームをやっている

思い切って書斎の模様替をした。庭師の口丸さん親子に力を借りて、腰痛のために買ったマッサージ機の付いたソファを二階の寝室へ運んだことで、何とか書斎の周りがすっきりした。物置のようになっていた折り畳みの机の上に置いてあるものを整理して畳み別な場所に置くことと広々した。

「見違えるようにさっぱりしましたね」

書斎に入ると誰もがびっくりする。

「これでわが家もお正月が来てくれるわ」

私はそう答えながら、毎年乱雑になっていった書斎が一応片づいてしばらく模様替えをしなくて済むことにほっとしていた。

留村さんが大津から年越蕎麦を届けに来て下さり、頼んで置いた何時ものお節料理が届くと大晦日が始まった。ぎりぎりまでお煮しめを炊いたり錦卵を作ったりしてくれたよしえさんも犬のロンの餌のことをこまごまと言いのこして京都へ帰って行った。

「ただいま……」

「おばあちゃん……」

になる。

「順太！ お宿題をしなさい」

真喜子さんの声にも知らん顔してジャンガラガラとやっている。みんな山のように担いできた荷物から色々なものを取り出して食堂のテーブルの上を占領する。

「このテーブルはお正月には綺麗にするのよ」

「はあーい」

いい返事が返ってくるが、次々ものが広がって行き、書齋にも散乱する。お正月の朝までに片づけばいいがどのようなことになるか、こつそりその辺のものを片づけていく端からものが増えて、すぐ元のもくあみである。テレビの紅白歌合戦が始まった。

ビデオに録りたい愛子が機械に詳しい。

穏やかな新年が明けた。食堂のテーブルはきちんと片づき、それぞれの箸紙の名前の前にお雑煮が置かれた。

「順太、深一郎叔父ちゃまを呼んで来て頂戴」

「はあーい」

転がるように二階に走って行った。

「明けましておめでとつ」ぞいいます。頼子一家がいないけど、一応皆でお祝い出来てよかったわ」

お屠蘇を廣太郎からお祝いして行く。

二日には東京から蛭田さんが撮影に来るといふ。正岡明さんも一家で挨拶に来られるという電話が暮にあつた。昔、父上の正岡忠三郎さんが必ずお正月には年賀に来られて、父と大いに

飲みあかしたことが思い出される。明さんも酒豪だろうか。

「深一郎 皆さんに挨拶しに来るのですよ」

「分かつてるよ」

美しい春着の祐子夫人と沙羅ちゃんを伴って明さんが年賀に来られた。

「松山の空港以来だね。あの時は大変だったの覚えてる？」

にこつと笑ってあの時より何となく大きくなった沙羅ちゃん

が

「はい」

と答えた。
蛭田さんが来られ、私が台所で立ち働く所を撮りたいのとことでお昼の用意を始めた。

正岡一家が帰られると我々家族を撮るといふ蛭田さんのために皆心接間に集まった。

「順太！ 深一郎叔父ちゃまを呼んで来て」

「はあーい」

帰る準備をして深一郎が二階から降りてきた。一時過ぎにタクシーを呼んで出るという。

「蛭田さんも一緒に駅まで送って行くのでその積もりをしときな

てよ」

心接間の椅子を動かして、自然に座って欲しいという。順太がふざけるのでなかなかシャッターが押せないので蛭田さんが困っている。走り回って疲れた順太がおとなしくなった所では

ちり。廣太郎と話している所を撮り終えた所で私は促して車へ誘った。

「先に深一郎さんを送って来て下さい」
という蛭田さんを無理やり車に乗せて芦屋の駅へ走った。

「ほつとしたねえ？ おばあちゃん」
「え？」

車をガレージに入れて帰って来た私に順太が話しかけた。
「やれやれ、ほつとしたねえ」

私の本音を順太が言っているのを聞きながら私は思わず吹き出していた。

「ほつとしたの？」
「うん」

三日は廣太郎一家が真喜子さんの実家へ移動する。

順太の言葉を貰うように思わず私は一人で伸びをした。雨が降っていて犬のロンに餌をやるのを忘れていたことを思い出し、カレンダーを送ってきた筒を二つ繋いでガムテープを巻き付けると

窓を開けて餌の入れ物に餌を流し込むことにした。ロンが不思議そうにその筒を見ていたが、私が

「お座りー」
と言つと座った。筒を持ち上げると餌が入れ物につまみ納まった。

「ロン、ごめんね。ちょっと不精させて貰いますよ」
わんわん、ロンはがつがつと餌を食へ始めた。

ようやく机に向かった私はいつものように仕事を始めると、ほんとうにほつとしている自分に気がついた。

句日記

汀子

平成十四年六月一日 芦屋ホトトギス会

草笛の名手なるべし館ひびく
短夜の稿債捌きゆかんかな
雨の色日の色重ね七変化

六月二日 関西野分会

えごの花伝ひて垂る雨雫
夏草の川原すなはち散步道
一枚の網戸の風に稿まとめ
新婚の消息を聞く涼しさよ
今朝のこともう過去となる四葩かな

六月二日 下萌句会

ともかくも稿債二つ明易し
展示替準備万端涼しさよ
短夜や明日をたのみて仕事置く

六月三日 ロイヤル俳壇

展示する仰臥漫録明易し
六月八日 北信越ホトトギス俳句大会前日句会
表情の涼しき出会ひなりしかな
涼しさに着けば忘れてしまふ距離
運転の茅花の白のつづきけり
顔の汗伝ふ首筋ありにけり
暑きこと覚悟ほどではなかりけり

六月九日 北信越ホトトギス俳句大会

青蘆に来て風音のささやける
葭笛を鳴らし心を近づける
どこまでも涼しき風と太陽と

六月十一日 大阪倶楽部

降り出してまこと梅雨入でありしかな
雨蛙葉を落ちさうに落ちさうに
紫陽花の色のととのふ雨となる
黒き闇一つ夜釣の火を置きぬ

案内状配り終へたる梅雨入かな
考へてゐるとも見えて雨蛙
夜釣の火日本海の闇深し
六月十一日 綿着倶楽部
椎の花句ふ境界線のあり

六月十三日 清交社

ハンドルを夏手袋の手に握る
気になりし黴がきつかけなりしかな
模糊としてえごの花とは遠き景
雨雫ほどにこぼれてえごの花
予定ほどはかどらぬ稿梅雨籠
黴といふことに気のつくまでのこと
黴寄せぬ仰臥漫録てふ展示
活けてある泰山木の花は別
黒といふお洒落に夏の手袋も
えごの花咲けばこぼる旅心

六月十四日 工業倶楽部

寝過ぎしてならぬ旅立明易し
見るだけで句つて来さう栗の花
丹波路の展けゆく景栗の花
書き終へて寝たるばかりや明易き
どの窓も閉めて置きしに火取虫

六月十八日 有恒倶楽部

花こぼし未央柳の雨上る
五月雨の音ありにけり夜の静寂
くも走る部屋に滞在三日かな
狭庭にも青芝育ち来しことを
雨上る朝の青芝立ち上る
青芝に緊張走りキックオフ
五月雨の上つてをりぬ旅衣

六月十八日 無名会

短夜や旅馴れてぬし旅疲れ
湖風の色を渡りぬ花菖蒲
又明日は旅立つ予定明易き
会場の今日は明るく涼しき灯

終るまで汗の勝敗語られず
密に見えぬたる色疎に花菖蒲
六月二十日 長野善光寺句碑除幕
二十二年前の思ひ出露涼し
山国の夏至とて旅路ある限り
善光寺境内涼し句碑除幕

六月二十二日 東北ホトトギス俳句大会前日句会

邂逅のみちのくなりし五月雨る
五月雨に濡れみちのくでありしかな
六月二十三日 東北ホトトギス俳句大会
梅雨寒を処すこともわが旅心
みちのくの緑を染めて雨上る
吊橋を渡る近道滝へ出る

六月二十六日 夏潮句会

狭庭にも一隅ありて竹落葉
結界のなかりし如く竹落葉
雲の峰ベルト着用サイン出る
青芝に立入禁止札掲げて
黴びさせぬ仰臥漫録展示して
雲の峰ぐらりと抜けて空の旅
一日もおろそかならず竹落葉

六月二十八日 時雨会

昼顔の浜辺行つたり来たりして
雨止んで涼しき顔の揃ひたる
水音に紛れたるより河鹿の瀬
砂に足とられ昼顔踏んでをり
記念樹もなじみそめたる青嵐

六月二十九日 野分会

えごの花散るを誘ひて雨雫
磴下るととき見失ふえごの花
六月二十九日 句会と講演の会
子鳥の縋るフエンスに近づけず
水草の花雨の糸纏れざる
六月の主宰に聞くといふ講話
質問を受けて涼しく応ふべく

廣太郎句帳

廣太郎

平成十四年六月四日 岡崎花鳥会

明易や車窓に富士を嵌め込みて
麦秋を貫き東岡崎へ

六月五日 一水会

木道を出でて茂に迷ひたる
六甲の暮れゆき火蛾の窓となる

六月六日 蕉心会

船音の空梅雨めいてをりにけり
挨拶はお疲れ様と会ふ臯月

薫風や樹上に雀樹下に鳩
鉄の橋桁凜と風薫る

七変化この銀行の名も変り
下闇へ誘ふ声の佳人かな

朝顔の二葉を並べ小商ひ
六月八、九日 北信越ホトトギス俳句大会

麦秋に鉄路歪んでをりにけり
花菖蒲白より風の起りたる

高僧の涼しく蓮如語りをり
木下闇蓮如の時代知る古木

六月十三日 土筆会

雨音を又聞いてをり明易し
花菖蒲都心の風に紛れざる

まひまひに鯉の泡といふ修羅場
六月十六日 伝統俳句協会通常総会

十五年 飛躍を誓ふ会 涼し
六月十八日 草木瓜会

多摩川を越えれば五月闇解け
朝光といふ著莪の花明りかな
稜線は仄と明るき五月闇
五月闇テールランプはいよ赤
著莪咲けり恥ぢらひの色少し置き
その中に魑魅を秘めて五月闇
六月二十日 長野善光寺汀子句碑除幕式記念句会
名刹に黴ひとつなき句碑除幕
梅天といふ句碑を祝ぐ白さかな
梅雨晴間見えて信濃を近づけし
六月二十日 登高会
鮎躍り出づ釣竿の一闪に
明易やあと百句程作らうか
短夜や原稿急かさねる人に
ゼラニウムよりソムリエの近付き来
その中の天然鮎といふ苦味
六月二十五日 若水会
鳩の子の潜るより親潜りけり
青芒 演習の砲轟けり
虹立ちて高層ビルの縮みたる
一瞬といふ鳩の子の潜りかな
青芒 稜線に日を集めつつ
地球より大きな虹の立ちにけり
六月二十八日 時雨会
五十鈴川渡れば神代河鹿鳴く
青嵐 裾を押しへて少女行く
昼顔や夜間人口零の都市

雑詠 汀子選

梅一枝活けて仏となられゐる
 春灯に経帷子を着せ申す
 中陰へ春星一つ発たれける
 皺といふ容赦なきもの初鏡
 長びける風邪よと思ひ見る暦
 会話欲りをれば電話来風邪の床
 冬麗の浮雲一つ野の句碑に
 北風吹くや句碑の孤高を顧る
 野の句碑の四季これよりは春を待つ
 天を行く熊野古道は梅が香に
 碧眼もいゆく中辺路梅寒し
 誰が辿る轍の跡や春の雪
 佐比売野に若菜を摘みし妻を恋ふ
 佐比売野の妻の挽歌の百千鳥
 佐比売野の寒芹とどき忌に籠る
 ニューイヤークンサート聴き初風呂へ
 松の内升さんの裔迎へたる
 NAVYの墓碑銘寒く故国向き

東京 坊城としあつ
 同
 熱海 嶋田摩耶子
 同
 熊本 河野扶美
 同
 同
 同
 榎原 稲岡 長
 同
 同
 同
 太田 波多野弘秋
 同
 同
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 同

大いなるものに凍蝶従ひぬ
 響き合ふ光となりて星凍つる
 凍つる星見上げ地上に生きてをり
 湖や雪嶺遙か天に浮く
 雪嶺の天に対ひて鞍なせり
 雪嶺の天より崖の懸りたる
 雪国を出てすぐ避寒心かな
 待春の伊豆の波音聞く宿り
 焚火の火とくに地獄絵見せもして
 玄関に大きな鏡室の花
 瑠璃色の空どこまでも冴返る
 一輪の濃紅梅より暮るる庭
 消息を淋しめば空風花す
 月凍つる群青の村その下に
 薄氷に朝の世界の動きけり
 風を踏み風に躓き寒鴉
 寒鴉高枝に倦めば地を歩む
 移し植ゑられたる土も春隣
 露の身のすこし弱気となりて病む
 襲ひ来る木の葉時雨の音なりし
 富士の空晴れて大地は冬霞
 寒紅をさして素早く女なる
 臘梅のどこがどう透けぬのやら
 年の豆数へてゐしを忘れをり

龍ヶ崎 今橋眞理子
 同
 同
 明石 中杉隆世
 同
 同
 新潟 安原 葉
 同
 同
 東京 山田 閨子
 同
 同
 鳥取 岡田 順子
 同
 同
 同
 神戸 山田 弘子
 同
 同
 同
 日野 木村 享史
 同
 同
 同
 東京 後藤 立夫
 同
 同

雑詠句評（五月号より）

確な描写に臨場感がある。梟を描いて妙。（汀子）

冬薔薇に時の流れの止まりけり 龍ヶ崎 今橋眞理子

秋も深まってくると、いよいよ季節の移り変りの忙しさ、淋しさといったものを感じる。

ところで今、目の前に咲いている薔薇は、冬という季節を忘れたかの様に、生き生きと華やかに咲いて居り、この薔薇を見るかぎり、時の流れといったものは止まってしまった、としか思わずには居れない。それほどに生き生きと美しい、冬咲の薔薇なのである。（忠彦）

この句から特別の思いが込められた冬薔薇が浮かんでくる。単純に解釈すると寒い中で咲く薔薇は時間がかかる。咲いてから後も何時までも咲いているのをまるで時の流れが止まったかのように萎えることが無い状態のままである。今作者の心の中も時が止まったように冬薔薇を見ている。（汀子）
（以下略）

梟の身を細くせしとき獲物 神奈川 志鳥宏遠

梟は森林に棲む夜行性で、昼は小暗い木の枝や木の洞でじっとしており、夜間飛び出して小鳥、野鼠、虫などを捕えて食べる。時には人里にも出てくる。飛ぶときは羽音をたてないという。普段は余り見かけないが、動物園へゆくと鳥禽舎に愛嬌のある表情で人々に愛されるものの一つである。獲物を見つけたとき、あの丸々とした体を細くして構える瞬時の動作を巧みに捉え描写されている。刹那の機微が目に見えるように、余情のある句である。（芳子）

梟と言えばもこもことした柔らかい毛に覆われた夜行性の鳥を思い浮かべる。昼間は殆ど見かけないが、夜になると獲物を狙って活動をする。この句は一見可愛い梟が獲物を狙って捕る瞬間を描き、その獐猛な面を見つけた時の驚き、的

若水集句評

廣 太 郎

猫の妻猫撫で声をもて応ふ 堺 竹本素六

この季節になると、猫はまるで赤ん坊の泣声のような声で異性を誘い「猫の恋」が始まるのである。筆者もまだそれを知らなかった頃その異様な声に仰天したものだ。作者の「猫撫で声」という表現が何ともその様子を言い当てている。

日本画の絵の具のやうな春時雨 神戸 藤井啓子

場所は特定されていないが、どうしても京都などの古都を想像してしまう。真に美しい景色を、平明な表現であるが故に心から堪能出来る。丁度この「ホトトギス」の表紙絵の色合いを想像する事も出来るのではないだろうか。

猫の恋誰にも止める事できず 橋本 塩崎万規子

人間の世界では「禁断の恋」などと言われる恋を、筆者も一度はしてみた、と思っっているかどうかは御想像にお任せするが、少し羨ましくもある自由なものが「猫の恋」であろう。人間社会と少し対比させているようなウィットも感じら

れる。

みづうみの色に加はり春時雨 大津 後藤恵代

作者の地名から、おそらく琵琶湖の景であろう。広い湖面に降る「春時雨」は結構ダイナミックなのではないだろうか。日本一広い湖の景ならではの季節の様子が見事に描かれている。

三毛・とらのあとより黒とうかれ猫 長岡 川上朝子

毛色の違う猫がいろいろ登場するが、ユニークに季節の様子が描かれている。失礼ながらこの三種類はどちらかというトシャムやペルシャと違い野良に近いのかも知れないが、それが故の野性味も感じられ、自然な様子が見て取れる。

春時雨上りしばらく黙す風 豊田 杉本淑代

いつの間にか降って来たと思うと、暫くするといつの間に止んでいる「春時雨」人間には気紛れとも映るものではないだろうか。まるで「風」と示し合わせたような季節の姿が活き活きと描かれている。

(以下略)